
月の桂 5

cassander

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の桂5

【Nコード】

N8631T

【作者名】

cassander

【あらすじ】

式部の君の独白。少将と別れた式部は田舎の受領の妻となつて下つていった。そこへ・・・

(前書き)

学問指南を終えた式部は、少将から逃れるために伊予へ落ちた。

橘の葉の濃くなる初夏の頃だった。去年の実は乾して香良い酒肴にしてあった。私はすっかり田舎染み、国守の家刀自になった。視察官が夜に我が家でお過ごしになるので、その支度を念入りにして欲しいと、夫は昼のうちに侍女に伝えていた。

「その殿の名はなんと言われるの」

「あの美男で有名な少将様だそうです。大層高貴な方をお迎えするのだから、粗相があつてはならないと、お方様によくお伝えせよと何度もいわれました」

なんとという残酷な定めだろう。あの方の心を引きとめておく事が叶わず、その辛さ惨めさに、この殿となら心穏やかに暮せるかと思つて都を出たのに、その方が来られる。素知らぬ顔で宴の献立や調度の配置、食器の指図をした。心の底では、ひよつとして少将様は私がここにいと知つて訪ねてくれるのかと、我ながら愚かしい希望を持った。酒の肴に橘の皮の乾した物をそつとしのばせた。少将様は気付かれるだろうか。私は奥の部屋で息を詰めるようにして時間が過ぎるのを待った。夜が更けて、夫が私を呼びに来た。

「少将様が、あなたを呼んで欲しい、挨拶したいと仰せだ」

「気分が悪く伏せつているとお伝えください」

「あなたの準備してくれた橘の肴の事で、どうしてもお話したいと言われるのだ。ご挨拶だけすれば良いだろう」

広間にはもう人は余りいなかった。少将様は昔よりも少し痩せて、昔の甘い貴公子振りとは違って、冷たい気配を漂わせておられた。

「この家刀自のあなた様に、今日の歓待のお礼を申し上げたくて、殿にお願ひしました。橘の趣向は大層趣きあつて良き物でございますね。それで和歌を一首詠みました」

私は冷や汗が流れるのを覚えた。気付いておられた。馴れ初めたあの夜の橋に応えて言われたのだ。

「・・・五月待つ花橋の香をかげば 昔の人の袖の香ぞする・・・昔親しくしておりましたある方が、私の事を情けない者と思われて捨てて出ていかれました。今はどんなに立派な方と共にお過ごしかと、この橋で思い出しましたよ」

少将様の美しくも冷酷な表情に、心は粉々に砕かれた。肩の震えを抑えられず、袖で顔を覆った。夫は私と少将様を交互に見て、はつと悟ったようだった。

「あなたはもう下がっていいですよ」

夫の声音も硬くきつい物だった。夫がこんなきつい声で私に物を言った事など無かったと、その夜暫く経って気が付いた。「どんなに立派な相手と一緒にになったのか」という少将様の言葉は、心に深く刺さった。先の無い少将様との恋に疲れて、安逸な暮らしを保証してくれる夫を選んだのだったが、少将様にはそうは取られず、実入りの良い受領の妻になったと思われていたのだ。少将様の心を一人占めできないなら、いつそ都から離れていたかっただけなのだ。それでも、ずっと心のどこかでは都と少将様が恋しかった。それが夫にとってどれ程罪深い事か、先ほどの夫のきつい声音に気付かされた。深夜夫が部屋に来て言った。

「知り合いだっただね。あの少将様とは」

「殿がこちらへ誘ってくださる前にお別れしておりました。私がここにいると知っておられたのでしょうか」

「少将様が望めば、あなたは着いて行く積りですか。連れ戻しに来て欲しかったのですか」

「殿には感謝しております」

「あなたが私に心を開いてくれた事は、今までも一度もなかった。ただ妻の務めを果たしてくれた。私はそういう物だ、穏やかに幸福ならば、それでも良いと思っていた。私を愛して欲しいと思っても無駄だと思っていた」

私は答えられなかった。

「少将様はご存知ではなかった。私が妻は亡くなられた大納言権家の姫様の教育係を勤めていたとお話すると、初めて今宵の接待を受けたいと仰せになったのだよ」

夫の声は、私への罰のように冷たく響いた。私はたまりかねて泣き伏した。夫はそれ以上何も言わず部屋を出ていった。私は二人ともに蔑まれた。一人は私だけを愛してくれなかった男。一人はどれだけ愛されているかに、私が気が付かなかった男。そして私は二人とも愚かさゆえに失った。

(後書き)

この先二人はめぐり合うだろうか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8631t/>

月の桂5

2011年10月9日04時45分発行